「塗間くんのこと」　作・浅野宇泰

塗間（ぬるま）くんのことを話します。
塗間くんは僕の友人で、とても気さくなやつです。
僕と塗間くんは誕生日も一緒で、生まれた病院も一緒。
そこから同じ保育園に通って、同じ小学校に入学しました。家の近所の気の良い酒屋のおじさんの倉庫の片隅を貸してもらって秘密基地を作ったときも、塗間くんは一緒でした。興味本位で倉庫のお酒に手を伸ばしかけたとき、すぐさま「ダメだよ」と注意してくれたのも塗間くんでした。

正義感があって真面目で、お調子者ではないけれどいつも朗らかに笑っていた塗間くん。

中学に上がってからは不登校気味で、あまり顔を合わせることも少なくなってしまいましたが、たまに登校した際には常に一緒にいるほど、仲の良い友達でした。

しかし高校に入る頃には父の転勤がきっかけで遠く離れてしまい、それっきり塗間くんと会うことはなくなりました。だんだんと疎遠になっていく様は、なんだか留めていたはずのテープの粘着力がだんだん失われていくようなものに似ています。その頃の僕は塗間くんとも会えず、あまり友達も出来ず、人間関係に苦労していましたが部活動を始めてからはだんだん周りに友人が出来ていきました。

それからまた時は経ち、２０歳になった時。部活動関係でちょっとした同窓会に呼ばれました。もちろん高校の同窓会です。僕はその時に初めてお酒を飲みました。一丁前に瓶ビールを注文し、届いた瓶を手にしたとき、

「ダメだよ」

と、塗間くんの声がフラッシュバックしました。塗間くんと会わなくなってから５年。久々に彼のことを意識しました。今となってはその顔貌も靄掛かったようにはっきりとは思い出せなくなったのがなんだか寂しく思えました。

周りにはもうすでに実家でこっそり飲んでいた同窓生もいたり、こんな場だけどお酒は怖いからとソフトドリンクを注文する子がいるそばで僕は塗間くんのことを思い出す。ぼうっとしていると、隣に座っていた同級生だった牧瀬さんが気を利かせてグ

ラスにビールを注いでくれました。

「そういえばさ、こっちの学校って出席番号って名前順だったんだね」

僕は高校入学時になんとなく思って口に出さずにいた疑問を、ふと口にしてしまいました。当時はそんなことすらも話す友人もいなかったのです。

「え、何。それが普通じゃない？」

ケラケラと笑いながら牧瀬さんが答えました。在学時は長い黒髪だった彼女の姿は今はなく、明るい茶髪のショートボブに変わっていましたが、その笑顔は昔のままでした。

「いや、俺って引っ越してこっちに来たんだよね。前の小学校も中学校も　生年月日順だったから」

「あ、それ聞いたことある」

と答えたのは同じく同級生の津田島（つだじま）くんでした。彼の短く刈り上げたヘアスタイルは当時から変わってはいなかったものの、右手の指に半分くらいまで吸ったタバコを挟んでいました。

「いや、べつに俺も詳しくは知らないけど、なんか……どこだっけな。どこかで聞いたよ。生年月日順ってのもあるって」

津田島くんの二言目には何の情報量も含まれていませんでしたが、どうやらそのおかげで僕がホラ吹きじゃないことが分かったのか「珍しいね～」と牧瀬さんが取り皿にサラダを取りながら返事をしていました。

「え、で、相田は何番だったの。高校では一番だったでしょ」

今更ながら相田、というのが僕のことです。名前順の出席番号では初めのほうになりやすい名字なのでした。

「４月１日生まれだから、一番だったよ」

「４月１日？　エイプリルフールじゃん」

「そうだけど、本当だよ」

「あ、そうか。１月１日が一番じゃないんだ」

生年月日で出席番号を振り分ける地域では、年度の分かれ目である４月から始まって３月が最後の方の順番となります。僕は出席番号という点ではかなり前の方になる運命を背負って生まれてきたのかもしれません。

「じゃあ、なんだかんだずっと最初なんだね」

牧瀬さんがサラダに生ハムを包みながら言いました。

「いや、最初は塗間くんだったよ」

「でも４月１日って……」

「彼の方がちょっと早かったんだ。だから僕が一番」

「ん？」

「うん？」
何故か、みんなの箸が止まりました。生ハム巻きのサラダも牧瀬さんの箸の上で、まだ止まっていました。津田島のタバコの煙だけが揺れていて、
「いや、じゃあ一番じゃん。最初じゃん」
津田島がタバコをもみ消しながら言いました。
「塗間くんは０。出席番号０番」

知らなかった。生年月日で出席番号を決める学校が少数派だったということも。知らなかった。出席番号０番なんてものが少数派どころか、存在する学校がないなんていうことも。それじゃあ、僕の通っていた学校は？　僕の友達だった塗間くんは何だったのだろうか。
あれからみんなはころころとたくさんの話題を繰り広げていましたが、僕の耳には今ひとつ入ってきませんでした。何かと話題を振られたものの、生返事しか出来なかったように思う。そんな変な気を紛らわすことに加えて、同窓会代が頭にちらついていたためか、お酒だけは時折口にしていました。そのためなのか何なのかだんだん思考と共にぐるぐると目眩のようなものを催してきたのです。これが世に言う酩酊というものなのでしょうか。鮭が川を遡上するかのごとく、酒が喉を遡上するところを無理矢理押し込めようと瓶ビールを手にしたとき、
「ダメだよ」
と、声がして、
辺りはすっかり静まりかえって、
僕と、
塗間くんのふたりきりで。
遠くの入り口から
酒屋のおじさんとお客さんの談笑が聞こえてきて、
ほこりっぽい倉庫の隅っこで、
「勝手に触っちゃだめだよ。おじちゃんに怒られちゃう」
制する塗間くんの左手が、
そこにはあったような
気がして、
でも僕はその手だけを見つめていて、
塗間くんがその時に
どんな顔をしてたのかは
思い出せませんでした。

１０歳の頃に、母親に連れられて誰かのお墓に行ったらしい、と言うのを車の中で母に聞いた。あまり記憶にもなくて、そこが誰のお墓だったのか、どうして母と二人だけだったのかもよく覚えていませんでした。

けれど、駐車場に止まった車から降りた時に見えた一瞬の景色と、その誰かのお墓までの道中の石の階段と緑色の苔にはなんだか見覚えがあるような気がして、十年前に確かに僕はここに来たような気がしました。

長距離を運転していた母の額には薄らと汗が伝っておりました。そういえば母はバケツ一杯の水を持っていました。僕は思わずはっとして、母が持っていたバケツを代わりに持ちます。

しばらく歩くと、あるお墓の前で母が立ち止まりました。

『塗間家』

と書かれた、墓標の前で僕は立ち尽くしました。

「母さん。ここって」

辛うじて、僕の声は絞り出せたのでしょうか。声にならない声に呼応するように、母が返事をしました。

「あんたがな、小さいとき塗間くん塗間くんって言ってたの覚えてる？　母さん初めて聞いたときびっくりした。でも礼太がきっとあんたについてくれていたんだろうなって、母さんはそう思ったんだよ」

墓石をじっと見つめる母の頬には一筋の涙が伝っておりました。

１０歳のあの時の僕には塗間の文字が読めなかったのです。母はその時に決心がつかず、真実を話せなかったと語りました。それから１０年が経って、そして僕は同じ場所で、母の旧姓が塗間だったということ、僕の父親のこと、そして塗間くんの本当のことを知ったのです。

僕が生まれるその瞬間まで生きて、その後は僕のことをずっと見守ってくれた、塗間礼太は、生まれて直ぐに亡くなった、僕の双子の兄なのでした。

おわり